慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山東京山『小説由井ヶ浜』：合巻における宮城野信夫の敵討ち
Sub Title	Tales of Miyagino-Shinobu : Santo Kyozan's "Shosetsu Yuigahama"
Author	津田, 眞弓(Tsuda, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.28 (2013.) ,p.95(28)- 122(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20130531-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山東京山『小説由井ヶ浜』――合巻における宮城野信夫の敵討ち

津田眞弓

1　はじめに

奥州白石（仙台藩）の姉妹による敵討ち、所謂「宮城野信夫（みやぎのしのぶ）」の活躍は、江戸時代中期以後、文学、演劇、芸能、絵画などで繰り返し取り上げられた。敵討ちが事実かどうか今も未詳のままだが、実説に基づくと長く信じられてきた。農民の娘が艱難辛苦の末に武士を討つという物語の構造が人々を魅了したのだろうか、各地への浸透ぶりが著しく、茶谷十六氏によれば、この話に基づいた演目を持つ地域が青森から沖縄まで全国に及び、百ヶ所を越えるという。[1]

周知の通り「宮城野信夫」姉妹は実録『奥州仙台白石女敵討』『慶安太平記』（両者とも成立年未詳）、浄瑠璃『碁太平記白石噺』（安永九〈一七八〇〉年初演）で形成された。宮城野信夫譚の享受を考える上で、これらの影響下に制作された諸文芸も広い伝播の後押しをした重要な資料群だが、上方で制作された読本『絵本敵討孝女伝』（享和元〈一八〇一〉年刊）については考察があるが、[2] 江戸で制作された草双紙に関しては言及が少なく、[3] 翻刻もほとんどさ

29丁裏・30丁表　宮城野信夫図

れていない。そこで今回は、幾度か「宮城野信夫」を合巻化した山東京山の作を紹介し、宮城野信夫譚を考える端緒としたい。

2　翻刻

宮城野信夫の敵討ちを扱った『姉はみやぎの妹はしのぶ小説由井ヶ浜』は文政四（一八二一）年刊、[4] 山東京山作、歌川国貞画、森屋治兵衛板。文政六年刊『楠歌舞妓礎』（画工、板元同じ）に物語は続く。本作は『碁太平記白石噺』と『絵本敵討孝女伝』に基づき、岩井半四郎、尾上菊五郎、市川團十郎など人気役者の似顔絵を用い、文章も歌舞妓の脚本を意識したあたかも紙上の芝居といった趣で制作されている。これは文政初頭に流行した様式である。草双紙なので全編に挿絵があるが紙幅がないので、画像はＷＥＢサイトに公開する。[5]

《凡例》①読みやすさのため適宜句読点と濁点、「　」を補い、平仮名を漢字に直した。その際、原文の平仮名は（　）をつけて振り仮名として残した。（　）の無い振り仮名は原文のままである。なお送り仮名は現在通用する形にした。原文に漢字が用いてある場合は、その表記に従った。②割り注式の表記は〈　〉、改行は／で示した。③翻刻者の注記は〔　〕で括って示した。④翻刻の底本は架蔵本である。底本の虫損、汚れなどで判読できない部分は、早稲田大学所蔵本（へ 13-3709）にて補った。

【表紙】

［上巻］京山作 国貞画／小説由井賀濱／上巻 巳春／「やまどりのはなも金。その矢におぼえがあらふがや」［中巻］ゆゐ賀はま中の巻／森治はん「父上の敵サア立ち上がつて勝負勝負」［下巻］京山作 国貞画／〈小説〉由井が濱 下／巳の春 森治板／「身におぼえなきこの一矢、当たりはずさぬ手の内は、たしかにそれと楠流、こりや人ちがいであらふがや」

【見返し】

［上巻］〈姉はみやぎの／妹はしのぶ〉小説由井ヶ濱／全本六巻／文政十四のとし／巳の初春／山東京山作／歌川国貞画／蝶々のまひにたてもの白露のきらめきわたる星かぶと菊　京水　［中巻］由井が濱 中の巻 二冊／巳春新梓／山東庵京山作五渡亭国貞画／錦森堂　［下巻］山東庵京山作／五渡亭国貞画／下の巻／小説由井濱／文政辛巳春 錦森堂梓行

【本文】

【上巻】〔一丁表〕〔序文の枠上〕「よみはじめ芝居ならば」〔序文〕本舞台三間のあひだ常足の〈低き舞台の事〉二重舞台藁葺の檐口を見せ、上の方に反古張の障子二枚建、此障子仕懸物向まん中に暖簾口、上下に松の立木、いつもの所に藁葺の門口、側に藪だゝみ、都て山中賤が家のかゝり、爰に〈役者ならば〉半四郎〈トおぼしき〉やつし女房のこしらへ〈地黒の古き総模様ト／郡内縞トつぎ〳〵の小袖、さげ帯の古くやつれたるを前にて結び〉あつらへの菊燈台をひきよせ、糸車をとつてゐる、三味線入の木霊山おろしにて満来明く。

〈文政三年庚辰首夏／脱稿同年初秋梓行〉山東庵京山戯編

〔一丁裏・二丁表〕〔口絵〕「白雲のたえずたなびく峯にだにすめば住ぬる世にこそありけれ」ト惟喬の親王の御歌はあれども錦の袖にひきかえて、つゞれ布子のしきしもの、糸の調べも松の風、よその夜なべの砧の音、打てかへたる今の身の上、人目はゞかる隠れ家に、春をも知らぬ乱れ髪。ことさら此身はたゞならぬ、明日をも知れぬこぼれ者。命定めの大厄と聞くにつけてもおそろしく、今にも討手か兵かと木霊の響きも胸に癪。思へばはかない身の上じやなァ。○今宵も大方夜半過ぎ、皆の衆も帰る時分。それにつけても道ならぬ山立、引剥の身の生業、もしものことでもあるまいかと、毎晩の心遣ひ。早う戻つてくださんせいで○ホンニ夜なべもかたづけて、どりや囲炉裏の下でもたきつけやふか。鬼の女房にや鬼神とやら、ヲヽそうじや〳〵。

〔二丁裏・三丁表〕〔口絵〕「桂男の顔さへ見えぬ闇の夜の小田の蛙もだんまりのまく」京水

〔三丁裏・四丁表〕よみはじめ所は名に負ふ天城山。山立の手下共、足をばかりに逃げ来たり。「出刃か」「野締か」「ひどいめにあつたなァ」ト足早に行く後ろから、またばた〳〵と逃げ来たり。「出刃も野締もまめでゐたか」「手ひ

どい目に出会つたなァ」「うんざりやすたかめが駈けてくるさへ、又虚無僧めが追つかけてくるかとびつくりしたはへ。山立も命あつてこそ、ちつとも早く帰る事だ。それにつけても親方はどうしたらうな」「そうよ」「大方今ごろは、あの虚無僧とやつつかやしつ」「根比べ」「定めて二人汗水漬く」「聞いてもぞつとするやうだ」「そりやそうと、宵に剥いだは万歳に取り上げ婆」「ひとりは飛脚。剥いだ皮さへ虚無僧に追つ立てられて、骨折り損。ほんにこれが山骨折つて坂にとられるのだ」「こだを言はずと、早く来やれ〳〵」と行き過ぐるあとより、飛脚「見れば女中、こなさんも裸で」「さればいなァ、あとの峠で剥がれました」「こちらの人も」「万歳楽〳〵」「旅は道連れ世は情、必ず風邪をひかつしやるな。向かふに見ゆるは確かに一つ家。今宵一夜を頼んでみませう」「ちつとも早くござれ〳〵」

山名宗全より斯波義景へ密事の飛脚、万歳「剥いだ羽織に着だ股引も、皆取られてしまひました」取り上げ婆

「姫ごぜの身をむごたらしう、ようはいだ事はいなァ」

［四丁裏・五丁表］山立の手下共、皆〳〵我が家へ逃げ帰り、旅虚無僧に出会ひて、からき命を助かりしと、頭の女房に物語れば、女房おしづは夫の身の上、もしやと案じる門口を叩くはそれぞと嬉しくて、扉開くれば夫にはあらで、二人の丸裸。一人は女、三人連れ。裸で道中旅姿、様子を聞けば、此山でかゝる難儀と聞くにつけ、我が身を悔やむ目に涙。一夜の宿りとひたすらに腰をかゞめて三人が頼む姿のいぢらしさ。情をするも身の祈祷。どうぞ安産あれかしと祈る心で三人を、「まァ〳〵こちらへ」とともなひて囲炉裏で肌を温めさせ、ありあふどてら、ぼた布子「まァ〳〵これを」とうち着せて、心をつけていたはりければ、地獄で仏と喜びけり。○かゝる所へ宿の主、のつさ〳〵と立ち帰る。見るよりおしづは駆け寄つて「ヲゝこちの人戻らんしたか。今宵の様子、何もかも出刃や野締に聞きました。大抵案じた事ではない」「そんならあいつらは」「さつき皆戻つてじや」「役にもたゝぬ木葉天狗、しかしばれ

ぬでまァしあわせ」と言ひつゝ、じろ〳〵見回す三人。「おしづ、此衆たちは」「此人さんがたは、これこう」ト、耳に口寄せ囁けば、「なるほど、おのしが腹の祈祷にもならうかい○してわいらは何者だ」「はい、私は梅の花と同じ事、山里はずんど遅い万才でござります」「こちらの女は」「はい、私は取り上げ婆でござります」ト聞いて夫婦はうち喜び、「はて、それは幸い。こゝにゐるわしが女房、今月があたり月。人目をはゞかる此隠れ家。ありやうは困り果てゝゐた所」「婆さんと聞いてお嬉しい。どうぞ首尾よく二人にしてくださんせ。これ手を合はせて頼みます」「イヤモウ、お頼みなくともこちの商売。何もかも此相生婆がのみこんでをりまする」「相生といふ取り上げ殿に万歳殿、幸先ようて、めでたい〳〵」つぎへ

［五丁裏］つゞき「わいらがさつき虚無僧にぶつちらされて、捨てゝきたあの衆の着る物、早く返して」「ヲ、それ〳〵」と立つて女房が甲斐々々しく見わけて着せる太り縞、にわかの馳走に相生婆、万歳も素袍の袖、御家繁盛御泥棒百万年と祝ひけり。「○して今一人の旅人は」「はい、私は、山名宗全より九州への密事の飛脚」ト、聞いて山立びつくりし、「何宗全が密事の飛脚とな。天の与へのその状箱。○それ」ト目配せて手下共、ばら〳〵と取り巻きて状箱奪ひ取り差し出だせば、山立手早く封押し切り、「さてこそ山名宗全より斯波義景へ徒党の密事。はてよいものが手に入つた。その飛脚めは木部屋へつなげ」「いま〳〵しい、おれ一人は貧乏くじ」「サァ婆さんはわたしと一緒に」「奥でお腹をさすりませうか」「万歳も御勝手でめでたくお祝ひ申ませう」「それがいゝ〳〵。出刃も野締もうんざりやすたかも休め」「サァうしやァがれ」と、飛脚を引立て皆〳〵奥へ入にけり。

「道踏み迷ひし旅の修行者一夜の御報謝にあずかりたい」

［六丁表］二の巻〈山立は密書を手に取り上げ〉○山名宗全斯波義景を語らひ東山殿を滅ぼさん結交ありと、か

ねて入れおく手下の注進、いまだ実否もわからねば事を両端にはかる折から、はからず手に入る此密書。亡君大池の家を興さんには究竟の時節到来両虎あらそふ虚に乗て足利家を恨みん事、時日うつさず大望成就、かたじけない。○それにつけても此密書」〈ト行灯引き寄せ読まんとする時、門口にて尺八を吹きすさむ〉

た「山中といひ夜ぶかといひ、合点のゆかぬあの竹の音。たしかに宵の」門口にて「道踏み迷ひし旅の修行者、一夜の宿りを御報謝にあづかりたい」〈ト声かけられて山立は、打うなづきて腹を据へ、密書をしっかり懐中なし、一腰ひっさげ門を開け〉た「我は宵の」も「おのしはその時」〈ト互ひにびつくり〉た「松の木下に焚き捨てのほのかに見しは宵闇の」も「春の如く千変万化、手いたくあたる山おろし」た「激しき手練に太刀風も、闇に紛れて相引きの」も「それがあらぬか此宿り」た「竹の柱に茅の家根、人目いぶせき菰畳」も「真屋のあまりの雨そゝぎも情は情」た「仇は仇。遠慮なしに今宵の宿り」も「彼誰時の別れまでしひて一夜を御報謝に」た「泊めて進ぜませう」も「それはかたじけない」つぎへつゞく

［六丁裏・七丁表］つゞき「しからば御免」た「マァずつトこつちへござりませ」も「いやもう思ひよらざる今宵の宿り」〈ト言ひつゝ、草鞋脛巾も取り捨て、塵うち払ひ上の方に押し直れば、主は渋茶、煙草盆〉た「これは〳〵思ひがけない御造作にあづかります。時に何となく御ゆかしいお住まゐナ」た「なんの〳〵ほんの山家の風ふせぎ。鹿小屋同然のあばら屋さ」も「浮世を離れた御侘住まい、四季の眺めもありのまゝ。神の作りし自然の景色、おうら山しう存じます」た「これは〳〵御挨拶。時にお客人になんぞ進ぜたいものだが ト言ふて山家の事」も「いや〳〵お心遣いくださるな。何もほしうはござらぬて」た「徳利酒も寒さふせぎ。何をがな肴に」〈ト言ひつゝ立つて取り出だす苧経包みと俎板、庖丁〉た「せめてこれでも手料理に」〈ト苧経の中より取り出だすを虚無僧は見てびつくり〉

も「此赤子を料理とは」た「ハ、ハ、〳〵知らぬ事とて驚きはもつとも。こりや猿の腹ごもり。山家の美食雁鴨よりはうめへものだ」も「いかさま聞けば猿とも思ひますが」た「なるほど赤子の顔にも猿のようながまゝあるものさ」〈卜俎板へ取り直せば〉も「いや暫く」〈卜声をかけ、さし寄つて明かりを照らしとつくと見て思案顔、うちうなづき〳〵〉も「少し存ずる仔細もあれば、それはそのまゝ元の如く菰に包んで拙者が御所望」た「アノこれを」〈卜不審ながら元の如く包んでかたへに取りのくる〉「シテ御修行者にはどれからどれへ通らつしやります」も「どこと申て泊まり定めぬ諸国修行者。仰山に申せば武者修行」た「いかさま御生国は」も「河内でござるが、いさゝか望みござつて国を立ち出でいづれの国にも暫くづゝ足を留めて土地の地理、人の人気、領主の器量、心をつけて見ます故、当国にももはや二十日余り逗留いたしました」次へ

[七丁裏・八丁表]た「さては士官のお望みかな」も「鶏口となるとも牛後となる事なかれ、士官の禄のとそんなさゝいな事を何にしませう」た〈驚く思入れあつて〉「いかさま骨柄と言ひ、宵の太刀筋、応仁の乱よりいまだ四海穏やかならず。すりや御修行者には六十余州を」も「風は息、虚空は体、目は眼、人せん世界を身ひとつに」た「をさめた胸の梵論字殿」も「頂く天涯、天が下」た「握る尺八その手の内」〈卜煙管を打ちつける、虚無僧これを打ち落とし、〉も「普化の文字はあまねくけす、徳化になびかす寛仁大度」た「猛威の笞は」〈卜煙草盆にて打つてかゝる。○虚無僧は身をかはせ、〉も「踏み落として」〈卜立ち上がり山立を蹴倒さんとする。山立の懐中より光を放つて振動する。〉も「はて心得ぬ今の動揺」。た「山家に馴れぬ御修行者、今のは木霊の山おろし、夜更けぬうちに奥の一間、物置がてらの小座敷で」も「一寝入りやらかしませうか」と以前の猿の赤子を包んだるを小脇にかゝへ山立が懐中へ心を残して一間の内へ入りにけり。山立は独言、「たゞ者ならぬあの梵論字。とくと実父をただした上、仕儀によつ

ては、一方の力と頼むも忠義のひとつ」トうちうなづく後ろより、「こちの人」「ヲヽ」「女房おしづか」トあたりを見回し、「まづ〳〵これへ」ト上座へ直し、「○双葉の前様へ申上ます。思ひ出だすも口をしきは去年の夏九州菊池の争乱にて、御家の滅亡、多々良之介義弘公には鷲ヶ峯落城の砌御自害、旧臣浪士も皆討死に、かく申す金井谷五郎友勝は、遠国の御使ひ御生害にもをりあはさず武運つきたる此体。腹かつさばき死出のお供と存ぜしが次へ

［八丁裏・九丁表］つゞき御大切なるはあなたの御身。御懐胎の御胤こそ大打家の御礎と一方を切り抜け、足を留めし此隠れ家。何卒首尾良く御産あらば、たとへ姫君なりとも神功皇后の例を引き、あなたも共に両大将、再び御家を興さんこそ、死に後れたる身の忠義とをしからぬ命をながらへ、此山中に憂き月日。いかに人目を忍べばとて、三代相恩の御主人様を女房どもおしづよと言ふたび〳〵のもつたいなさ、口をしさ。御推量なされてくださりませ」「みづからとても、義弘公御自害の折から、共に刃に伏さんとは思ひしが、お腹のやゝも早二月。お胤が愛しさ大切さ、命ひとつをながらうるも御家のおため、どうぞ血筋が残したさ。それにつけても忠心深きそなたの介抱。草葉の陰からさぞやさぞ、義弘公も御満足。世が世であらうものならば、恩賞加増もあるべきに、変はりはてたる此身の上。人目はゞかる賤家の薄き筵も薄からぬ厚きそなたの志。かたじけないぞや嬉しいぞや。」次へ

［九丁裏・十丁表］つゞき「ハヽァ、ありがたきそのお言葉。所領加増の恩賞より、百倍まさりし身の冥加。お気遣ひなされますな。先刻、はからずも手に入たる此密書。山名宗全斯波義景と合体なし、足利家を覆さんと内通の此書簡。此挙に乗つて義兵をあげ、中より斬つて出づるならば、勝利を得ん事目の当たり。御家の残党一味の野武士、軍用金は切取り、強盗、道ならずとは思へども忠義故なら是非もなし。御安産ありし上は、なほも軍慮のほぞを堅め、時を伺ひ旗揚げして、御家の御名を輝かし、亡君の御恥辱をすゝぎまするでござりませう」「何から何ま

で抜け目なき谷五郎、此上共にそなたが力」「お心安う思し召しませ」「さはさりながら、これがまァ、九州の探題」「大打多々良之介義弘公の北の方や近臣の」「身のなりゆきかと思へば〳〵」「変はりはてたる」「世の中じやなァ」

○かゝるをりしも、門口をけはしく打ち叩き「道踏み迷ひし旅の者、ちとものが尋ねたうござります」ト、なほもけはしく打ち叩く。谷五郎はつごと声。「ヱ、やかましい今開けるはへ」ト言ひつゝ立つて門の口、開けてびつくり捕り手の大勢、ばら〳〵と込み入て両人を取り囲み、頭と思しきいかつの侍、大声あげ「さんぬる頃、菊池争乱の砌、滅びうせたる大打多々良之介義弘が余類、ならびに義弘が妻の双葉の前此所に忍び居るよし次へ

［十丁裏］つゞき注進の者あるによつて、山名宗全家来志賀大七、召し捕りに向かつた。覚悟ひろ、いで腕回せ」「こは思ひよらざる御疑ひ、大打の双葉のと、かつもつて覚えなし。こりや定めて人違えへ、門違ひで」「いや、とぼけまい。論より証拠を見せうはい」ト奥の方へ向かひ「皆参れ」ト言葉の下より手下の面々姿も変へて大小ぼつこみ二人を中に取り囲めば、両人はびつくり。「こなさんたちは」「手下のやつら、こりやどうじや」「ヲ、胆が潰れるはづ。大七殿の指図によつて、手下となつて入こみしも、二人が素性を探らんため」「もはや逃れぬ天の網」「異議に及ば、踏みつけて縄かけうる。返答は」「どゝどうだ。ヱ、」「此大七が睨んだ眼に違ひはねへ。その女こそ義弘が妻の双葉の前と入こませたる四人が注進、今も今とて門口にて、何もかも立ち聞きした、義弘が没落の砌より、双葉の前は懐妊のよし、いかにも此女が姿を見るにはらみ女に疑ひなし。さすれば餓鬼めは義弘が胤、敵の末は根を絶つて葉を枯らせと管領よりの命なれば、謀反人の胤を宿せしがその身の因果。縄かけて渡せばよし、異議に及ばゝ踏みつけて縄かけうか」「サァそれは」「サァ〳〵返答は、どうだ、ヱ、」○かゝるをりしも、奥の方より「方々、お控へくだされい」ト声かけて立ち出づる以前の虚無僧。志賀大七きつと目をつけ、「その方は何者じや」次の巻へ

［中巻］［十一丁表］三の巻　「拙者事は諸国行脚の旅虚無僧、今宵はからずも此家に泊まりあはせ、これなる女は義弘が妻の双葉の前と知つたる。それがし元は菊池の家来、谷川次郎友晴と申せし者。あれなる若者がためには主人とかしづく双葉の前、なか〳〵もつて縄目も刃も当てられまじ。さるによつて、それがしへ暫時双葉の前を御あづけくださらば、自害をすゝめ、もし得心なき時は不憫ながらも手にかけてそのそのもと様のお役目は立ちますやうに」「いかさま此女を双葉の前と見極めたるその方、いかにも承知いたした。しからば此若者は当座の人質」虚無僧「こりや御もつとも。いかに御亭主、此女中はしつかりと此梵論字があづかりました。心おきなく人質に」「所詮かなはぬ御運の末果て、是非もない」「その方共は此家の四方を取り囲み、逃がさぬやうに心得たか。それがしはかの辻堂にて待ちあはさん。しからば梵論字暫時の間」「合図は門の松ヶ枝に寝鳥の群鷺、礫を打つて立ちさわがば首受け取るか」「たゞしは水子をお渡し申か」「二つに」「一つ」「必ず共に」「お気遣ひなされますな」「皆参れ」「立てヱ、」トつぎへ

［十一丁裏・十二丁表］つゞき　谷五郎を人質に志賀大七は立ち去りけり。○あと見おくりて虚無僧は門口をさしかため、何か心に思案顔。双葉の前はうろ〳〵と震ひわなゝく手を取つて、「お気遣ひなされますな。何事も此梵論字が胸にござれば、まァ奥へ」と一間の内へいざなひけり。○宵に泊まりし万才、飛脚立ち出でゝ「着物を剥がれたその上に、大切なる状箱も取り上げられ、又その上にあの木部屋にくゝされてゐたを万才殿の情で縄目はといてもらふたが、状箱がなくつちやァおれが身の上」「此万才もひよんな所へ泊まりあはせ、まだ飯にさへありつかぬヲ、〳〵あるは〳〵、幸ひの飯びつ」「そんならおれも」と両人がてんでに盛るやらかつこむやら。「ヤレ〳〵これでやう〳〵人心地。此上はちつとも早く」「逃げるにしくはござるまい。太夫殿が参るなら、才蔵なんぞもそろり〳〵

と逃げ支度。思ひがけなき後ろより、飛脚が肩先乳の下まで斬つて捨てたる以前の虚無僧。万才は胆を潰し、垣をくゞつて逃げ去りけり。虚無僧は飛脚が血潮を壺へ絞りこみ、門口へ立ち出でゝ松を目あてにうつ礫。寝鳥の群鷺飛び去りければ、ほどもあらせず志賀大七、谷五郎を捕り手に囲ませ上座に通れば、谷五郎はあたり見回し様子いかにと案じる顔つき。梵論字壺を真ん中へ押しなほし、「双葉の前に自害をすゝめ、不憫ながらも腹を断ち割り取り出だせし義弘が胤の水子。いざ、お受け取りくだされい」と赤子を刃に貫きて大七にさし突くれば、さすがの大七見てびつくり、怒る眼の谷五郎。梵論字は事をもせず「此上にも双葉の前が首打つてとは存ぜしが、あまりとや不憫に存じ、首の代はりは此黒髪。ほかに女のなきあばら屋、お疑ひは晴れましたか」「さそくの働き、でかしめされた。さすがは菊池の御家来、これにて拙者も役目がすむ」「此上は此若者に御詮議は」「見逃すのも武士の情。水子は確かに受け取つた」「しからば」「梵論字殿」「お役目御苦労」「皆参れ」と肩いからして立ちかくる。次へ

［十二丁裏・十三丁表］つゞき○谷五郎は一腰を抜き放ち「御主の敵」と斬りつくる。「これ谷五郎、早まるまい」ト、姿を改め立ち出づる双葉の前。「ヤァあなたは御無事で、こりやどうじや」「虚無僧殿の情の智略」「して今渡した水子と言ひ、したゝる血潮の女の黒髪」「不審はもつとも、水子と偽り渡せしは、最前それがしへ馳走にと見せられたる猿の赤子の腹ごもり。したゝる血潮を見せずんば、よも誠とは思はじと木部屋へつなぎしかの飛脚、逃げんとせしをたゞ一打ち、まつた黒髪は宵に泊めたる取り上げ婆へ金を与へて髻を切り払ひ、志賀大七へ与へしは、双葉の前殿の首打てと言はせぬための口ふさげ」「何から何まで抜け目なき、さそくの御智略。火急の難儀をお救ひありし御恩は、海山谷川二郎元晴殿」「イヤ、その名も当座の偽り事」「して御家名は」「我も名乗れば、橘氏摂河泉押領使楠多門兵衛正成が後胤、今民間に蟄したる宇治多門之介長節、一度は菊水の旗を天が下へひるがへさ

んと思ひ立つたる我が大望。味方を集めんそのために忍び姿の武者修行」「ハ、ァ氏といひ器量といひ、あつぱれなる思ひ立ち」「我〳〵こそ大打義弘が家臣、金井谷五郎友勝」「みづからは義弘が妻の双葉。どうなる事かと思ひしに、御身の情にあづかりて、再び世に出るお腹のやゝ」「此谷五郎友勝も主君の仇たる足利氏くつがへさんには最究竟。御味方申その印に」ト懐中より錦の包みを取り出だし、「これこそ天竺より伝へたる大打家の重宝、稀代の明鏡、肌身離さず所持なせしが、今宵の恩義を謝するため、二つには御味方申す印の固め。いざお受け取りくだされい」トさし出だせば、多門之介押し戴き、「聞き及んだる大打家の宝、達多の明鏡、さては最前そのもとを足下にかけんとなしたる時、五体たぢろぎ懐中より赫奕として輝きしは、此鏡の威徳であつたか」「此上はいづくにても旗揚げあるとも、一番に馳せ参らん」「着到初筆は次へつゞく

［十三丁裏・十四丁表］つゞき金井谷五郎友勝」「多門之介長節殿」「大望成就の固めの礎」「女ながらもみづからは夫の敵、花の御所踏み破らんはまたゝくうち」「あら〳〵喜ばしやなァ」「様子は聞いた此通り」注進に駆け出す以前の門万才、それと見るより谷五郎、水もたまらずたゞ一打ち、これはと驚く双葉の前。長節につことうち笑ひ「手の内見事」谷五郎「ハ、〳〵〳〵」ト芝居ならば拍子幕。

○それはさておきこゝに又、駿河の国のかたほとり、百姓の与茂作とて正直な一徹親爺、姉は宮城野、妹は信夫、孝行者の器量よし、親子三人うち連れて菜種の花道畦づたひ「なんと姉よ、今年は菜種もふつさりして、何もかも豊作じや。明日は村の正月じや。おのしたちにもよいべゝ着せて正月をさせるぞや。喜べ〳〵」「いへ〳〵わしらが正月せうよりは、とゝさんの好きな酒一杯づゝも飲ますのが何よりの楽しみじや。のふ、姉様」「そうとも〳〵。よその衆のやうによいべゝ着てびらしやらせうより、わしが機の手織り木綿、とゝさんに着せてみるが、こちやうれし

い」「やれも〳〵孝行なやつらではあるぞい。おれももとは奥州生まれ、岩城殿の家来、二本差したなれの果て、世が世ならおのしたちにこんなざまはさせまいもの。はて是非もないよねたちじやなァ」「またと、さんのてんごう口」「ほんに昼飯が遅くなる。早く畑へ」「サァござんせ」と急ぐ細道、来かゝるは山かげが家来志賀大七。道を急がんと与茂作が開く畦道、雨上がり思はず蹴上げし泥水がかの大七野袴のすそへかゝるも、白髪の与茂作行き過ぐるを大七が家来へそれと目配せに次へ

［十四丁裏・十五丁表］あと追つかけ襟首捕らへ「やい土百姓め、おらが旦那の袴のすそへ泥水を蹴つつけながら御免と一言めかしもせず、なぜ黙つて通りやァがつた」「さてはそうでござりましたか、御大家様のお通りと存じました故、ちつともお邪魔にならぬやうにと急いで通りました故」「ヱ、ぬかしをるな。その痩せ脛で蹴上げた水、知らぬとてすまさうか。犬蹲にうつつくばひ、幾重にも詫びた上なら了見のしようもあらうが、ぎみがまむかしやァ我々が踏み殺してしまうぞよ」「いやはやこなさんたちは、猫か鼠じやあるまいし、わしも元は武士の果て、手足も人並みについてある」「やァ言はせておけばつけあがる痩せ親爺め」「面倒な」「それ」ト家来が抜き連れて斬つてかゝれば、与茂作が持つたる鋤でまくしかけ力任せに打ち据ゆる。頑丈親爺手利きの早業、二人の娘は胆をあぶ〳〵、「と、さん怪我してくださんすな」「誰ぞ止め手はない事か」ト つぎへ

［十五丁裏］つゞき焦る二人に気を配り、「わいらは早く逃げてゆけ。おれも後から今行くぞ。○どつこいさうはしてこいな」と、片手殴りに打ち散らせば、志賀大七はこれに怖れ手も下ろさずに遠くから「それ打て、開け」と言葉の指図。後の者共大七が威勢に怖れて一人も立ち寄る者はなかりけり。大七は心づき、持たせおきたる半弓を取つて堤へ駆け上り、下がり拳に狙いを固め、びやうと放つ矢あやまたず襟よりかけて喉の鎖与茂作は急所の痛手、

そのまゝ、息は絶えにけり。

信夫「此矢に印せし志賀大七とやら、いづくいかなる人じややら」百姓「大七とはたしか山名宗全様の御家来」

信夫「さては山名の家来志賀大七こそ親の敵。ヲ、そうじや」

国貞画／山東京山作／筆者藍庭晋米

［十六丁表］巻の四○かくて宮城野信夫が嘆き言ふべうもあらず。さて、あるべき事ならねば村の者寄り集まりて野辺の送りを営み、七々の追善も果て、後、宮城野信夫、村長方へ書き置きを残し、僅かの田地をあづけおき、いづくともなく立去りけり。

これより五年たちて後

その頃都堀川のほとりに、楠普伝才と聞こえし弓馬剣術槍長刀の達人、その名遠近に聞こえ六波羅殿へ御師範を申上げ御覚えめでたければ、時の歴々普伝才が門人ならざるはなく、ときめきけり。しかれども妻もなければ倅もなく、歳六十を越えて一人身なるは一向の見識ありての事ならんと門人らも噂しけるとなん。さてある日、六波羅殿の御内意なりとて、音川夏元殿より使者をもつて仰に、そのもと儀最早老年に及び一子とてもこれなく、楠の流儀一代にして絶えなん事いかにしても残念に思し召す間、目がねをもつて門人の内にて養子に見立て願ひを出すべし、との口上。普伝才ありがたく御請け申て使者を帰し、次の日免許以上の門人ばかり連名にて招きけるが、門人らはかねて昨日の御使者は跡目の事と噂を聞きて、誰々彼かと評判もつぎへ

［十六丁裏・十七丁表］つゞきもしやおれかと欲に目のない玄関より内通り、小倉袴のひだを揃へ親指のたこ撫でさすり、先生のおいでをこそは待ち居たる。ほどなく白雲頭の小侍に唐紙開かせ立出づる普伝才、赤ら顔にて

鼻筋通り岩のやうなる頑丈親爺。熊の敷皮にどつかと座し、鋭き眼にて睨め回し「これはいづれもうち揃ふて早速のおいで、満足いたす」ト会釈すれば、門人らは養子にならうの欲があれば、いつもよりは格別に頭を下げ中にも免許頭の志賀大七進み出で「何事かは存じませぬが、今日のお招き御状の連名、残らず参上。御用はいかに」と手をつけば、普伝才敷皮をはづし「かたじけなくも六波羅の御内意として、門人の内、目がねをもつて流儀の跡目相続せよとのありがたき仰せ。打おきがたく門人の内御用に立つべき者、目がねとあれば贔屓は私 此普伝才が倅にいたす者、およそ日本にたゞ一人。その姓名を御披露申さん。そのためにおの〳〵を招き申た」ト言葉半ばに志賀大七「大かたその姓名はしの字かの字ではござりませんか」ト言ふに普伝は睨めつけて「しの字かの字とはしがの文字、又しても大七殿、粗忽千万。身どもが目がねは新参の内弟子氏多門之助。これよりほかに御用に立つべき弟子は持たぬ。後は残らずその身一人の剣術使ひ。一人前ならいづかたでも普伝が弟子じやと申されい。養子と定めしは多門之助、吉日を選み養子の願ひいたす間、内々の吹聴、おの〳〵左様に心得て給はれよ。何はなくとも酒一つ、それでゆるりと大七殿 つぎへ

〔大八〕「大谷氏先生へきこへるぜ」〔中央上の男〕「先生はいつも怖い顔だ」〔左上の男〕「ちと退屈ひらめだ」〔中央下の男〕「なるほどそうさ」

［十七丁裏・十八丁表］ つゞき 頼み申ス」ト会釈して奥の一間へ入にけり。門人共はあての槌、違ひ棚のやうな口を開いて暫くあきれてゐたりしが、ほどなく取り出す酒肴。「蛤の吸ひ物は稽古始めを見るやうじや」トそろ〳〵悪く言ひながら打食らひてぞ帰りける。志賀大七早う腹立ちの茶碗酒に酔ひが回り、弟の大三郎を伴ひ、その夕暮れより六条の廓へしかけ、引け四つ過ぎに酔ひがさめて、思へば〳〵多門之助に跡目を取られて残念至極ト 次へ

［十八丁裏・十九丁表］つゞき弟大三郎を招き、「さて先刻も知つての通り、かねて懇意にする浪人者の成風秋夜、今宵はからず此所にて出で逢ひしは幸ひ、何卒多門之助めを闇打にもして普伝が跡目はそれがしが取るやうなよい智恵もあるならば頼み入るとうちかけて言ふたなら、引かぬ奴と睨んだ眼に違ひはあるまい。おのしも共々頼んでくれろ」ト言ふに、大三郎打うなづき、「なか〳〵きやつもたゞ者ならず。かねて我々を手なづけんとはかる様子、察する所、我々が主人赤松家へ取り入らんとの下心。頼めば引かぬは知れた事。きやつをこつちのぽつぽへ入れ狂言の裏をかく、しようはいくらも有馬山。お気遣ひなされまするな」ト二人が話すひそ〳〵声。かねて宵から心をつけし、姉は宮城野妹は信夫、五年以前に村を立ちのき、己と廓へ身を売つて、多くの人に身を寄せて世間の噂を聞き出すも、親の敵が打ちたいばかりと一心に凝り固まりし守り刀の鯉口くつろげ「サァ姉様、支度はよいか」ト勇む妹を押し鎮め、「志賀大七といふ名は宵に聞きしかども、とゝさんを打たれたるその時は、年端もゆかず、怖いが情でその場を逃げ去り、顔は確かに見知らねども、とゝさんを射殺せし半弓の矢に次へ

〔秋夜〕「やれまて宮城野、早まるな」〔信夫〕「ヱ、口おしいナァ」

［十九丁裏・二十丁表］つゞき志賀大七とあつたが証拠、さりながら世には同じ名、同じ名字もあるまいともいはれまじ。今宵はとても籠の鳥、茶屋の男を呼びにやり、だましてとつくと聞き正し、いよ〳〵赤松家の志賀大七に違ひなくば、神や仏のお力で」「首尾よく敵を」「これ声が高い。まァおじや」ト姉は姉だけ落ち着きて、急かぬ心の長廊下、知らぬふりして奥座敷、心残して帰りけり。○かくて更けゆく夜半の風、ねぐらを帰る雁の声。表座敷のめりやすもいつかはやんで、火の用心二階を回れの声さへも、遠く聞こゆる寒念仏。宮城野信夫は抜き足差し足、思ふ敵に違ひなしと、屏風の外へ忍び寄り、「あしかのさん〳〵」ト相方女郎を呼び出だし、後へ回つて一突きト呼べど

もさらに答へなし。ヱ、面倒なト屏風押しのけ、「親の敵、覚えたか」ト右と左へ飛びかゝり、氷の白刃を突きかくるを心得たりとかいくゞる、又突きかくる二人が腕首しつかと捕らへ「こりや兄弟、早まるな」「ヤァ御前は秋夜様。こりやどうじや」「ヲ、サ不審はもつとも、志賀大七は此秋夜が逃がしてやつた」「ヱ、そりやお情ない」「恨むはもつとも。まゝ心を落ち着け、白刃も心もとつくと納めて身どもが言ふ事、まァ聞きやれ」ト、言はれて二人はがつくりし様子いかにと尋ぬれば、成風秋夜声をひそめ、「志賀大七は楠流も達者な奴。ことさら今宵は彼が弟大三めも連れの一座、剣術使ひ両人に無手な女のたゞ二人。小太刀の覚えもおぼつかないト案に違はず今の手並み。廓の掟で枕元に刀が無いから返り打ちにはなるまいが次へ

〔外：逃げる大七〕「危ねえ事をしたじやァねへか」

〔廓：宮城野〕「証拠と申スはその一品。侍のあらう事か遠矢をもつてとゝさんを射殺しました。その矢の羽中に志賀大七と」

〔廓：秋夜〕「いかにも〳〵女の身として親の敵を打ちたいとは、あつぱれな魂、感心な事じやぞ」

［二十丁裏］つゞき締め殺しもしかねぬ奴ら。最前身ども、おのしたちが隣座敷の回し部屋で様子をとくと聞きし故、不憫と思ひ、二人は小太刀の早業、しかのみならず今宵彼が一座の武士七八人は助太刀との事、此所はわれらにまかせ、密かに立ちのき給へとだまして二人を帰したは、その方たちに本望を遂げてやりたさ」「とは又何故でござんすへ」「さればさ、今言ふ通りの志賀大七細腕にては思ひもよらず。これよりそれがしが弟子となし、主へも申ふくめて人にも知らさず鎌長刀の手を教へ、表晴れて敵を打たば、誠の本望。主とても廓の女郎が親の敵を打つならば、あつぱれ手柄、義に臨んでは欲得にかゝはらぬが此廓の人心。たゞ何事も此秋夜に打まかせよ」ト理の当然に

兄弟はありがた涙にくれにけり。

〔茶屋の亭主〕「よん所ない方からお頼みのお客でござり升」

〔宮城野〕「まァ出てみんしやう」

［下巻］［二十一丁表］五の巻

〔枠の上、三味線の女〕「おもしろやなれてもすまの夕まぐれすなどる舩の、ヤァしい〳〵」

〔枠の上、化粧する女〕「よほどかんが立つてきた。精出して初音丸を飲みなよ。ホンニ此おしろいはとんだ使ひい、」

お邪魔ながら此所へちよつと口上、此度江戸京橋京伝見せにてうりひろ候。●声のよくなる薬▲初音丸〈一包六十四銭／半包三十二銭〉何によらず声を使ふ御方様、常に用ひて声のよくなる事不思議なり。いかほど声を使ふとも、此薬を飲めば声のかるゝ事なし。一段語らんと思ふ時、飲めば喉涼しくなりて、声の立つ事妙なり。常に懐中して重宝なる丸薬なり。子どもの百日咳に効く事妙なり。痰にてぜり〳〵する御方によし。またこれを飲めば酒を水となして、酔いをさまし、酒毒払ふ、たまらず。

▲大極上々吉にほひ入御おしろい●雲の上　一包六十四銭　顔へつければぷん〳〵してあたりをはらふ。包ひ袋もいらぬおしろいなり。寒の水にひたしてあくを晒しぬいたるおしろいなれば、お顔に艶を出だす事うけ合なり。

▲二天膏　一貝三十六銭　切り傷すりこはし、ねぶと、腫れ物、よこね、がんがさの類、医者様いらずに直る妙薬なり。これは御存じの宮本武蔵の伝方にて伝来正しき膏薬なり。詳しくは能書に記せり。

〔器を持つ娘〕「たつたどん、おいらんでよばつしやるよ。これさ、づう〳〵しぞよ」

［二十一丁裏・二十二丁表］○此所いづれも無言なれば、書き入れなし

［二十二丁裏・二十三丁表］さるほどに宮城野は親の敵は志賀大七と確かに知れ、打て恨みを晴らさんと秋夜を師匠と頼み、主がゆるして下座敷にて長刀鎌の稽古をなし、敵打の時節をぞ待ちゐたる。

○さて、ある時宮城野の座敷へ茶屋の亭主来たり。「モシ花魁、さる御方よりのお手紙にてお頼みありし田舎の大尽、お前さんを名ざし、どうぞお頼み申ます」と頼みければ、常から心安き茶屋の事いやとも言はれず此日茶屋にいたりしが、今からすぐに隅田川の花を見んとて、宮城野信夫をはじめ茶屋の内芸者幇間茶屋の嬶まで引き連れて、かしこにいたりしに、今を盛りの八重桜、どうも言へぬと大尽笑壺に入れば、幇間末社もとり〳〵に悪い地口をそしりあひ、「そりや蛇が」と女芸者をおどかせば、後ろから性根草うちつけるもあり、禿が摘みし蓮花草を取つて駈け出だせば「やらじ」と後から追ひかけられ、五十余りの男が孫のやうな禿と狂ひ騒ぐも幇間の勤めぞかし。宮城野はさすがにはしたなき様もせず、信夫に手を引かれてやう〳〵と歩み行様、誰が目にも大夫とは見えけり。かくてとある料理茶屋へいたり、上下二間を借り切り大酒となりて、末社をはじめ茶屋の男までに山吹の花を降らせければひとしほ調子も高くなり、春の日も早く暮れて夜の四つごろにやう〳〵となりも静まり、大尽のお帰りとみな〳〵うち連れ堤づたひに行き過ぐる物陰より、頭巾目深く顔隠し黒仕立ての侍五人ぬつと出で、ものをも言はず宮城野信夫をひつ捕らへんとするを、二人はかねて秋夜が教へし小太刀の心得もあれば次へつゞく

［木に小刀で止めた振り袖に］「〈みやぎの／しのぶ〉身請金千両」

○骨董集　三編　京伝遺稿京山補述近刻／○女粧図考三巻　京山人百樹近刻／右は女の風俗世につれて変はる事を上古中古近古と三段に分かち図を出だし和漢の諸書を引て説き諭し、紅おしろい歯黒をつける事、眉をそる事の始

まり、櫛簪髪の風にいたるまで、昔と今と大変はりある事をいと詳しく書き著し、女にも読みやすき仮名書きの書なり。

［二十三丁裏・二十四丁表］つゞきひつぱづして逃げんとすれども早業の痴者敵しがたく、高手小手に戒められ、かねての用意と思しく船へ乗せていづくともなく連れ行きぬ。かの大尽はじめ皆々ちり〴〵に逃げうせけるが、物陰に隠れゐたる幇間、後へ回つて見れば、宮城野信夫身請金と信夫が振り袖へ記し、金千両残し置きしは、どうしたわけがあるか、作者にもはかり知りがたし。

○それはさておき、志賀大七は夏元殿の目通りにて、多門之助と試合をなし多門之助にうち勝ちなば、普伝が跡目を願はんとの巧み、姉の岩手を頼み、此事を夏元殿の北の方より夏元殿へ申入れを願ひけるが、事済み、来る十五日鎮守八幡の神ン前にて大七多門之助試合させよと普伝才へ仰せけるに否みがたく御請けを申しけり。かくてその日になりければ、音川夏元殿供人美々しく鎮守八幡へ参詣し給ひけるが次へ

〔老侍〕「岩手殿の上げ物じや。御披露さつしやれ」

〔奥の侍女〕「はい〳〵」

〔北の方脇の老女〕「お珍しいよくお上がんなされた」

以前お年寄りを勤めし岩手、いつ見ても憎い面と、御側の女中心の内で思ふ。

［二十四丁裏・二十五丁表］つゞき怪しき浪人体の大男すれ違ひて行き過ぐるを夏元殿駕籠の内より見とがめ玉ひ駕籠脇に囁き給へば駕籠脇の侍声をかけ、「コリヤ待て、イヤサお侍待たれよ」「此方の事でござるか」「いかにも」「シテお乗り物はどなた様」「西六波羅の管領音川百合之介夏元殿」「拙者に御用の仔細はな」ト聞いて夏元駕籠の戸

押し開け▲「とゞめたは別でもない、その方は当所の者か、又は旅人か。姓名は何と申すぞ」■「拙者は遥か東国者、近頃上京つかまつり、下ヵ京辺に籠居いたしておりまする。いさゝか習ひ覚えたる技をもつて世渡る生計の痩せ浪人、成風秋夜と申す者でござりまする」▲「しうやの文字はな」■「秋の夜と書きまする」▲「秋はなほ夕まぐれこそたゞならぬ。たゞならぬ骨柄、此夏元が目にとまり姓名を尋ねし印、はて何をがな」ト思入れあつて、懐中より短冊取り出し、矢立の筆にてさら〳〵としたゝめ駕籠脇に渡し給へば、駕籠脇秋夜に向かひ、「心をこめられし主人の賜物、次へ

［二十五丁裏］つゞきいざ」と渡せば、秋夜短冊を押し戴き、■「打おこすあら田にあさる群雀鷹の拳に心せよかし〈なつもと〉」▲「あら田は新田、鷹の拳に心せよ、御浪人」〈しうや〉■「なんと」▲「打おこすといふ五つ文字はあら田を祝せし夏元が寸志。喜ばしいか、御浪人」■「痩せ浪人のぬくめ鳥」▲「放ちて帰す許しの短冊」■「確かに頂戴つかまつる」▲「此末広く都の内にあさる雀の放し飼ひ、さりながら燕雀一度興国の企てあらば鷹の拳の一掴み」■「何がなんと」▲「重ねて逢ふ」と駕籠の戸ぱつたり。▲「乗り物やれ」ト行列揃へて急ぎ行きぬ。秋夜

「それがしかねゞ〳〵多門之助と心をあはせ、金井谷五郎をはじめ寄々集むる義兵の一味、時節をうかゞひ旗揚げせんには、管領夏元が面体見知りおけと多門之助が知らせによつて、今日此所へ来たりしに、夏元に見とがめられはからざる此短冊。あら田は即ち新田の文字、すりや此秋夜を新田の末と聡くも悟りし音川夏元。都の内を放し鳥とは油断をきせて搦め捕らんときやつが手立て。はてなァ」ト、しばし思案も鋭き眼。「〇此上は夏元が帰りを待ち伏せ人知れず、ヲ、そうじや」

［二十六丁表］六の巻 よみはじめかくて秋夜は鎮守八幡前の茶屋へいたりければ、下女立ち出で「これは秋

様先刻よりお待ちかね、まァ〳〵あれへ」と奥二階へ案内につれて打通れば、志賀大七弟大三も立ち出で、「先刻より待ちかねました。まづ〳〵」と上座へ直し、「さて今日はかねての願ひ氏多門之助と試合の勝負。夏元公の御前といひ、家督定めの晴れ勝負、立ち合ひのかゝり口はいかゞしてよかろうか、先生の御指図何分頼み入申す」とおもねる言葉の空笑ひ。秋夜は思案の小首を傾け「多門之助は普伝殿へは近頃の入門。これまで諸国を遍歴、いかほどの手練あるや、その奥が知れ申さぬ。しかのみならず勝負は時の離れ業、思ふたやうにはいかぬもの。勝つも負けるも魂一つ。万一うち負け給ひなば、はて、闇はあやなし梅の花、人こそ知らね茅は隠るゝ。とくと分別いたされよ」ト薪に油の悪智恵は、多門之助と言ひあはせ。大七が心の内探らんための言葉なり。とは知らずして大七はすり寄つて声をひそめ、「拙者とてもかねての覚悟。もしうち負けたその時は人知れず多門之助を」「こりや音高し。何事もひそかに〳〵」「ともかくも力と頼むは先生一人」「いやもう及ばずながら力一杯」「もはや試合の刻限にも間もあるまじ。拙者はこれより別当方へ参るべし。秋夜殿にはこれにてしばらく御休息　おつつけ吉相お知らせ申さん。大八は先生のお取り持ち。御酒の相手に二三枚掴み寄せて御馳走申せ。しからば御免」と、大七はかしこをさしてぞ急ぎける。

○ここに又普伝才は多門之助を召し連れ別当方へいたり、夏元殿へも申上げて試合の場所は[つぎへ]

［二十六丁裏・二十七丁表］[つゞき]鎮守八幡の広庭と定め幕うち回して足場をならし、用意整ひしよし申し参れば、多門之助懐中より一通の願書を出し、普伝才へ事の仔細を申し述べて、取り次ぎを願ひければ、普伝才はもつとも願ひなりと得心なしてかの願書を夏元殿へ差し上ければ、披見あつて多門之助を召し出し、「もつともなる汝が願ひ、志賀大七は赤松家の家来なれども、親の敵とあるからは誰彼の沙汰に及ばず。夏元が聞き届けた。勝手次第」と

仰せければ、多門之助はつと引き伏し「今に始めぬ御人徳。恐れながら多門之助め、感心奉りまする。定めて彼らも」「いや何事も後での事」ト仰せの内にどん〳〵と打出だす八つの太鼓に夏元殿、「もはや試合の時刻なれば、設けの用意。それがしは普伝才諸共いざ神前へ立ち越え見物せんと別当に案内させ長上ミ下モをくゝしあげ石の階ゆら〳〵と歩む姿は音川の音に聞こえし智仁勇備わる威光に人々は頭を下げてぞゐたりける。

〔料理茶屋平清の女中〕「はい〳〵かしこまりました」／〔芸者〕「此前挿しはとんだいゝねへ。いつお買ひだ」〔芸者〕「きのふ吉さんが持つてきたのさ」／〔女中〕「モシ水を上がりまし、モシエ」

〔二十七丁裏・二十八丁表〕〔遠くで試合見物をする夏元、普伝才。広庭で長刀を持つ宮城野、鎖鎌で戦う信夫に〕「ア、それ〳〵そこを打ちや」／〔鉄扇で指示する多門之助〕「それ棒組、信夫つけ入れ〳〵」

○京山口上「私儀、昨年はちんふんかんの作にとりかゝり、草双紙の作大につづけ申候。今年はと存じ所、春は女粧考の作に日を暮らし、夏は暑さに耐えがたく、秋は久々病気にて、今年もやう〳〵三組ばかり新作いたし候。巳の初春より心をきりかへおもしろそうな作たくさんに御目にかけ可申間、相変はらず御贔屓願ひ上候。

○末に御披露いたし候はらみ薬、近所にて用ひゝ子御もうけの御方もあまた御座候。又男の腎薬にも相成申候。是は私も心に覚え御座候間、御請合申候。

〔二十八丁裏・二十九丁表〕○かくて志賀大七、氏多門之助、支度整ひければ、普伝が門人立出でゝ楠流に削り立てたる白樫の木刀二本、広庭の真ん中へ押し直せば、大七多門右左より立ち出でゝ音川殿普伝才へも礼をなし、じり〳〵と詰め寄する。此時幕の内垣の外よりさし覗く見物警護の諸人、今ぞ勝負と固唾を飲んで目も離さず拳を握つて控へけり。双方木太刀を取るよと見えしが、大七進んで打ち込むを多門之助がはつしと受け留め、「いかに大七、お

身が稽古は拙者が目からは小児も同然。手を下ろすには及び申さぬ。かねて教へおきたる拙者が門人、彼らと太刀を合はせ給へ。彼らを見事打すへ給はゞ、拙者を打たも同じ事。流儀の跡目はそこもとへお譲り申す」ト言ふに大七頭を振り、「いや〳〵聞かぬ〳〵。卑怯未練な多門之助、おのれ虚無僧と姿をやつし出つくはせたる天城山、金井谷五郎」と言ふを聞いて夏元殿へ聞かせじと多門之助が打込む木太刀に大七が眉間を打たれてたぢ〳〵。「両人参れ」の声の下、幕の内より駆け寄る二人の白装束。右と左へ詰め寄せて、「いかに大七、我々は先年汝が手にかけし百姓与茂作が娘、宮城野信夫也。いつぞや多門殿の弟子を客にしたて、向島にて我々を奪ひとり身請けの金を残しおき、我々を隠しおかれしは、汝が返り打にさせまいと多門之介殿の情也。いざ〳〵勝負」と詰め寄すれば、大七はせゝら笑ひ、「証拠もなき敵呼ばゝり、馬鹿尽くすな」「イヤ、証拠なしとは言はれまじ。半弓にて射止めたるその矢に印せし志賀大七」、多門之介かたはらより「何と確かな証拠であらう」「やァ〳〵女、敵打は此夏元が許したぞ。心静かに勝負せよ」「かたじけなやありがたや」と宮城野長刀取り直せば、信夫は手早き鎖鎌、「勝負〳〵」と詰め寄する。大七は二人をくわつと睨みつけ、「かとんぼの女郎共、返り打だぞ、覚悟せよ」と、段平引き抜き太刀風鋭く切り結ぶ。多門之助はかたはらより「それ打て開け」と指図の鉄扇。二人の女は胡蝶の如く心は弥猛にはやれども、敵は名に負ふ志賀大七、危ふく見えしその折しも、袖の内より打出す多門之介が手裏剣に、大七襟をはつしと打たれ、たぢろぐ所を宮城野すかさず長刀取り延べ、高股かけて斬り落とせば、信夫は鎌の鎖にて、刀を絡んで引き落とし

次へ

［二十九丁裏・三十丁表］つゞき乗りかへつて両人がとゞめの刀刺し通せば、夏元公をはじめとして「できた〳〵」と扇ぎ立て、諸人が褒むる声々のなりは暫くやまざりけり。

○かくて夏元公、普伝才多門之助諸共別当方にて休息の時も移りて、獅子ヶ谷の鐘。夏元殿普伝に向かひ、「老人にはそれがしが乗り物にて帰られよ」「ありがたくは候へどもそれはあまり」「いや苦しうない。老いをいたはる身が寸志。それがしは馬上にて立帰らん」と乗り馬引かせて打またがり行列うたせて帰られけり。

○こゝにまた志賀大七の弟大三はかの茶屋に大七が吉相を待ちゐたるに、若党一人馳せ来たり、大七が打たれたる様子つぶさに話しければ、大三は地団駄踏んで無念がり、「兄の敵は二人の女、打て恨みを晴らさん」と駈け出だすを秋夜押し止め、「又敵は武士の恥、様子を聞けば敵打ちは夏元が許せしよし。夏元を打てこそ大七殿も喜ばれん」ト勧むる秋夜が心中は、大三が手を借りて夏元殿を打たせんと巧みの舌をひるがへし、弁舌にまかせて勧めければ、「しからば闇を幸ひに音川が帰りを待ち伏せ、兄が恨みを晴らさん」と、刀ぼつこみ馳せ出けり。

○こゝに又普伝才は夏元殿の言葉にまかせ、夏元殿の乗り物にて館へ急ぐ夜の道。かくと見るより大三はかねて忍びし藪陰より見れば、見知りし夏元殿の乗り物なれば、さては夏元供を落として忍びの帰り、天の与へと踊り出で、待ち設けたる九尺の槍先、言葉もかけず乗り物のたゞ中、ぐさと突き通せば、突かれても斬られても主人でなければ供人は皆ちり〳〵に逃げて行く。後よりすた〳〵多門之助、かくと見るより馳せ寄つて、槍も引かざる後ろより、水もたまらず後ろ袈裟。「狼藉者は多門之助が斬り取りしぞ、出会へ〳〵」の声を聞き、馳せ寄る供人、提灯を差し出だせば、「ヤァ狼藉者は志賀大七が弟なり。さては敵打の遺恨なるか」ト聞いて普伝は顔差し出し「当の敵を打取りしは多門が手柄。今こそ渡す軍慮の一巻。先祖より伝はりし菊水の旗。確かに受け取れ。これしきのへろ〳〵傷」と気の張り弓も弦切れて前へばつたり、多門之助声を上げ「普伝才は吐血の急病、館へ急いで手当の薬湯、多門之助は後より追ひつく。乗り物急げ」と押しやりて、あたり見回し「かねてそれがし楠が軍慮の一巻ならびに菊水の旗

手に入んとわざと普伝が弟子となり、これまで心を尽くせしに、はからず手に入る此二品。此上は成風秋夜と心を合はせ、両虎の勢ひ時を得て大望成就も心のまゝ。アァ喜ばしやなァ」ト二品をしかと懐中なす。次へ

［三十丁裏］つゞき折も来かゝる宮城野信夫。それと見るより多門之助、「それがしがはからひにて身請けもすんだる二人の女。ひとまづ普伝才が館へ来たり、心静かに支度して本国へ帰るべし」「何から何までお礼は言葉に述べがたし。しからば御供」「イザ」と言ひつゝ一声呼子を吹き立つれば、多門之助が一味の大勢いづくよりかばら〳〵と馳せ集まり、「軍師のお迎ひ」●夜も更けますれば此本はこれぎり、めでたし〳〵〳〵。

〈由井ヶ浜後編〉楠歌舞妓梁／右当ル巳の秋出板仕候

○京伝店売り物の狂歌

「読書丸気根の薬もの覚えよくなる事の奇妙不思議さ」／〈○女はらみ薬／○男大腎薬〉懐妊丹〈一才五匁／半才二匁五分〉「ひとしづく水にやどして月役の桂男をはらむ練薬」○効能能書に譲りこゝにはぶく。

〔草双紙を読む芸者風の女〕「白牡丹といふ薬おしろいは誠によいよ。一包が百廿四銭だよ。京伝店の奇応丸は一粒十二銭だが、誠によく効くさうさ。虫下しの無病丸や京山の篆刻は何故書いてないねへ」

〔寝転ぶ女〕「読むが面倒だと思つて書かねへのだらう。しかし書き入れが詰まつたせへかもしらねへ」

京山作／国貞画／文政巳春／藍亭晋米筆

注

（1）「『娘敵討ち白石口説』と『団七踊り』」、『日本歌謡研究』四十、二〇〇〇年十二月。

（2）山本卓「『絵本敵討孝女伝』」、『国文学』六十五号、一九八九年一月。李忠澔「正成伝説と宮城野信夫譚」、『超域文化科学

紀要』十五号、二〇一〇年十一月。

（3）前述李氏論文に山東京山作、文化五（一八〇八）年刊の合巻『小説娘楠樹』に関する言及がある。

（4）見返しに、「文政十四年」とあるのは間違い。詳細は、拙著『山東京山年譜稿』（ぺりかん社、二〇〇四年）の当該項目に譲る。

（5）http://web.keio.jp/~edo/

付記　この論文は平成二十四年度慶應義塾学事振興資金による助成の成果の一部である。